

防長と『万葉集』

令和元年 8月1日（木）～29日（木）

新しい年号「令和」の典拠、『万葉集』。初めて漢籍以外、日本の古典から引用されたということでも話題になりました。実はこの『万葉集』、山口県にちなんだ和歌も収められています。

そして、『万葉集』といえば、現存する最古の和歌集ということで覚えておられる方も多いと思いますが、現在のような『万葉集』理解は、江戸時代以降に整えられたものです。出版の隆盛と相まって、『万葉集』と、『万葉集』をめぐる言説は現在の山口県、防長両国へもやってきます。

防長の人々が『万葉集』をどう受け止めてきたか、『万葉集』に何を見てきたのか、その一端を覗いてみましょう。

【1】^{まんよう ちうた}万葉千歌（^{かとり なひこ}塩田家文書^{和漢} 398）

安永3年(1774)に^{かとり なひこ}楫取魚彦によって編まれた、『万葉集』の注釈付き秀歌集、『万葉集千歌』の写本です。巻末の識語から、天明6年(1786)に、多賀社(現山口市)の大宮司高橋有文(右文)によって書写されたことがわかります。表紙には「文化八年^{こうかつちよう}校割帳 御改四百八十一部 惣卷数一千一百八十九卷之内」の印が捺してあり、同社の什物(蔵書)として管理されていました。

同社は山口近辺の人や山口勤めの武士に蔵書を貸していました。この資料は、文化文政年間(1804-1829)に山口宰判作事方小弘方御茶屋番御道具方などを務めた塩田時貞が

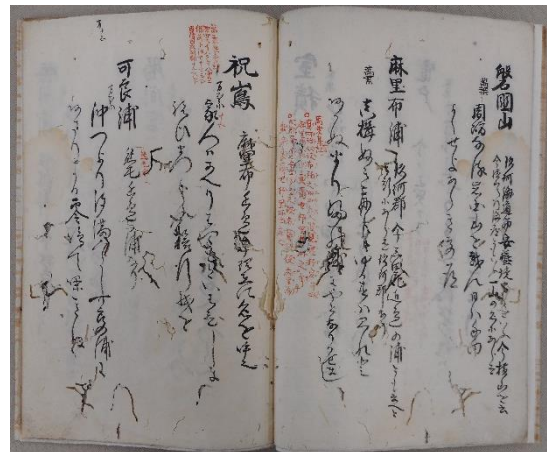


借用したことで塩田家に伝わったと考えられます。

当館諸家文書中には他にも『万葉集』の注釈書や語彙書がありますが、その多くが大身の武士や庄屋など、経済力のある家に伝わったものです。国学の隆盛とともに、『万葉集』も再評価されていきます。これらの本は教養のためにと地域の中心的な家・組織で入手され、貸借などによって周辺へも広がっていきました。

【2】周防長門名所和歌（多賀社文庫 19）

文化2年(1805)、萩藩は越前藩主松平治好に贈るため、雲谷等村に防長二国の名所絵に詩歌を添えたものを作らせました。その際に作成された詩歌の書き出しの写しです。識語から、多賀社大宮司の高橋有文（右文）が、文化7年までに雲谷等村の手許にあったものを書写したと考えられます。



歌枕を中心とした名所を描き、詩歌を添えて屏風などに仕立てて贈ることは、平安時代以来よく行われてきました。萩藩によるそのような営みがうかがえるとともに、地域の人々が防長両国の名所に対しても関心を持っていたとことがわかります。

【3】周南緑地 万葉の森（リーフレット昭和 59-71）

昭和43年度(1968)から61年度にかけて整備された周南市最大の都市公園、周南緑地の西緑地内にある万葉の森のパンフレットです。昭和26年に発掘された古代のハスの実から発芽・生育した大賀ハスを植えるのに合わせ、『万葉集』ゆかりの植物を約130種植栽展示しています。

このような植物園は、公園に個性を持たせるため、また日本の伝統文化に対する再評価の流れに乗って、昭和初期から作られはじめました。戦後になって、文化施設の増設期に古代史ブームが重なり、全国各地につくられていきました。



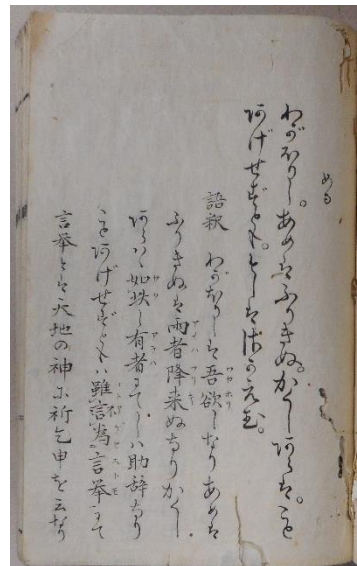
【4】^{おお や し ま の し ら べ}大八洲廻 調（毛利家文庫 15 文武 115）

文久3年(1863)12月に編集が開始された歌集です。明治34年(1901)5月に毛利家編輯所記録書類出納であった福井清介の進言により毛利家文庫へ加えられました。序によると、「大和心」を「武く雄々しく堅めにかため」るために、「ただ教を宗とし」、「歌の巧拙にはかかはら」ずに日本の古典から抜粋し、神祇（三輪）・君臣（幾久）・父子（狭井川）・夫婦（八雲）・兄弟（御統）・朋友（墨縄）・重農（白檀生）・尚武（高城）・雑（高佐士野）の9部に分類・排列したものです。歌のうつくしさよりも内容を重視し、歌によっては教条的な注釈も付けられている点で、一般的な秀歌集、注釈書とは趣を異にします。

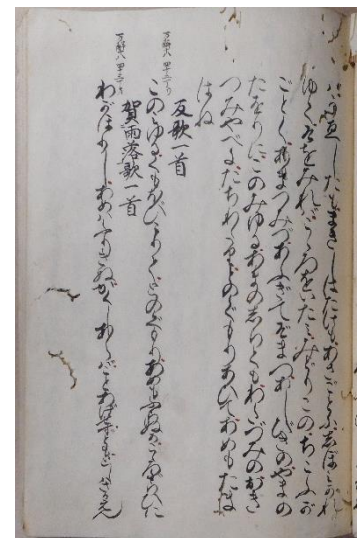
序には『古事記』・『日本書紀』（記紀）から代々の国史、歌集は『万葉集』から南北朝時代の『新葉集』までを対象としたとありますが、本資料で確認できるのは記紀抜粋分と万葉抜粋分のみで、2冊から成ります。（2の1）は序を備え、記紀抜粋分の刷物と、万葉抜粋分の内「白檀生（重農）」の巻の筆書とが、巻次はばらばらに綴じられています。試し刷りと原稿をまとめたもののようです。

一方、（2の2）は萩藩士で和歌をよくした山田昌之による『万葉集』の抜粋で、巻次も整っています。但し、（2の1）にある注釈や、記紀抜粋分がありません。本文上部余白にある「万解…」の注記は、当時広く流布した注釈書『万葉集略解』上でのその歌の位置を示しています。（2の1）にある注釈の中には同書の記述に即したものが多くみられ、且つ（2の2）で「高佐士野（雑）」に分類されている歌が（2の1）では「白檀生」へ配されていることなどから、万葉抜粋分の叩き台の可能性が高いです。

幕末の明倫館では和学も教授されましたが、本書の編集には不十分だったようで、編輯局員が京都へ研究に出向いています。2冊の関係を見るに、記紀抜粋分と万葉抜粋分は別々に作成され、進捗状況にも差があったようです。8月18日の政変以降、閉塞感の増す長州藩としては、急ぎ「大和心」を核とした結集をめざしたものと推察されます。



(2の1)



(2の2)